

山中湖のワカサギと東京帝国大学

齋藤暖生

キーワード：大学の地域貢献，雨宮育作，西垣晋作

Japanese smelt (*Hypomesus nipponensis*) in the Lake Yamanakako
and the Tokyo Imperial University

Haruo SAITO

Keywords: social contribution of university, Ikusaku Amemiya, Shinsaku Nishigaki

1. はじめに

近年，極度に専門化した研究のあり方への反省，疲弊する地域社会を再興する必要性の高まり等から，大学の社会貢献に注目が集まり，各地域・各大学で地域社会との交流や協働の実践が行われている。大学演習林は，すでに1980年頃から意識的に地域社会に開かれたあり方を模索するなど（東京農工大学農学部附属演習林，1999；石城，2008），大学界では早くから地域貢献に取り組んできた組織といえる。この先も息の長い地域社会との連携をつむいでいく上で，過去に行われた大学による地域貢献の具体的事実は大いに有効な知見となるだろう。

本稿は，富士癒しの森研究所の所在する山梨県南都留郡山中湖村において，東京大学（東京帝国大学）が地域貢献をした歴史的な事例として，山中湖に生育するワカサギを取り上げる。山中湖のワカサギの導入に関わったのが，農学部水産学第一講座（現・水産資源学研究室）の雨宮育作であり，その特徴的な漁法である穴釣りを導入したのが森林利用学講座（現・森林利用学研究室）の西垣晋作であった。

本題に移る前に，山中湖の魚類相やその活用の観点から，両氏の果たした役割を確認しておきたい。

山中湖は，およそ1100年前の富士山噴火の際，溶岩流が桂川を堰き止めたことによって形成された新しい湖であり，在来の魚類は少ない。『山中湖村の自然誌』（山中湖村自然誌編集委員会，2006）によると，文献によって3種あるいは4種などとされ，その内訳も一致してこなかったが，「在来魚の可能性のある種」としては，ウグイ（地方名アカハラ），アブラハヤ（同ニガツパヤ，バカツパヤ），ギンブナ（同ジブナ），キンブナ，ドジョウ，ホトケドジョウ，ナマズにとどまる。これに対し，生育が確認されてきた魚種は約35にのぼる。したがって，記録のあるな

しにかかわらず、大半の魚種が人為的に外の水系から持ち込まれたものである。雨宮が導入したワカサギは、数ある外来魚種の一つにすぎないが、村民の漁業および観光業にとっては、特筆すべき重要性を有している。すなわち、ワカサギ導入後の増殖の成功は、專業漁業者を生み、さらに冬季の遊漁客を惹きつける観光資源となった（山中湖村自然誌編集委員会，2006）。現在は、湖面の全面結氷は稀になっているが、以前は、西垣の導入した氷上での「穴釣り」が「山中湖そのものの観光資源化」（山村，1994：191）に大きく貢献した。

このように山中湖における漁業・観光業の基盤形成に大きく貢献した両氏について、以下では、彼らの経歴を踏まえつつ、それぞれが行なった導入事業について知り得た事実について述べる。なお、原文を参照することが一般に困難であることから、なるべく当人たちの原文を紹介したい。さらに、導入後に両氏が山中湖に訪れた記録についても報告する。

2. 雨宮育作によるワカサギの導入

2.1. 雨宮育作の経歴

雨宮育作（図-1）は、明治22（1889）年に山梨県東山梨郡日下部村に生まれ、大正3年に東京帝国大学農科大学水産学科を卒業、大正8（1919）年に同大学院を満期修了した（雨宮育作先生記念事業実行委員会，1985）。農学部総務課人事チームによれば、大正9（1920）年に助教授として東京帝国大学農学部に着任し、昭和4（1929）年教授に昇任、昭和25（1950）年に東京大学を定年退官した。その後、日本大学、名古屋大学でも教鞭をとり、江ノ島水族館長も務めた（雨宮育作先生記念事業実行委員会，1985）。

雨宮は水産学第一講座に属し、カキの生態やマイワシの脊椎骨数の地域差に関する研究に専門的に従事した。また、後進の指導として檜山義雄（4で後述）によるワカサギの研究にも携わった（東京大学百年史編集委員会，1987）。山梨県の出身であることから、学生時代および卒業後を通じて、富士山麓の湖水の研究にも取り組んだ（雨宮，1966）

2.2. ワカサギの導入

雨宮ら（1931）は、試験放流として富士五湖および、山梨県内の溜池においてワカサギを移入したことを報告している。以下、関連する箇所を抜粋する。



図-1 雨宮育作の肖像
資料：水圏生物科学専攻所蔵

富士五湖並ニ縣内溜池ニ於テ公魚ノ繁殖ヲ試験セントス。

霞ヶ浦ヨリ公魚受精卵ヲ購入シ孵化放流セリ。

(中略)

河口湖 自大正八年至大正十二年二, 三月ノ頃四回ニ亘リ三百六十萬粒孵化放流。

山中湖 自大正十一年至大正十三年二, 三月ノ頃三回ニ亘リ三百五十萬粒孵化放流。

(中略)

河口湖, 山中湖ハ成績良好ニテ (中略) 山中湖ニテハ大正十三年六月ヨリ漁獲ヲ始メ目下一ケ年約二千貫ノ漁獲アリ。

(中略)

山中, 河口, 精進湖ニハ在来公魚ヲ産セザリシガ放流後自然繁殖スルニ至リ重要漁獲物トナレリ。

(雨宮ら, 1931, p. 464-465)

このように、県内各所への試験放流の一環として、大正 11 (1922) 年に初めて霞ヶ浦産のワカサギが山中湖に放流された。そして、山中湖での放流は短期間で実を結び、この報告がされた昭和 6 (1931) 年にはすでにワカサギは重要な水産資源となっていた。このことは、ワカサギの導入により昭和初期に山中湖村内に専門的漁業者が生まれたとする山中湖村自然誌編集委員会 (2006) の記述と符合する。

他文献では、山中湖へのワカサギの導入に関して、若干異なる記述も見られるので、その辺りの事情を検討しておきたい。寺田 (1955) は、「ワカサギの放流は、大正八年、雨宮育作博士が霞ヶ浦から持ってきたのが始まりである。 (“振出し” の項参照) その後、大正十一年、当時の農林省が移植したといわれる」(p.113) とする。山中湖村自然誌編集委員会 (2006) も、最も古いワカサギ放流の記録は大正 8 (1919) 年としており、山中湖村内では大正 8 年を起源とする説が受け入れていた (山中湖社会科副読本編集委員会, 2012)。しかしながら、寺田 (1955) のいう参照先、「振出し」の項では、雨宮から聞いた後日談として、山中湖の住民がウグイへの影響を恐れて、送られてきた卵を夜中に野外に放置したことを雨宮に告白したことが記されている。だいぶ後になってからであるが、雨宮自身、自らの手でこの顛末を書き留めている (雨宮, 1966)。該当部分を以下に引用する。

初めワカサギを移入した時に一つのエピソードがある。河口湖では船津の役場の吏員の方に熱心な人がいて、良く手伝ってくれた。そのため卵の保管や湖内に入れた後の注意も行き届き、二、三年後にはワカサギがふえて魚の少ない山国の甲府の人々に喜ばれ、湖辺の人ばかりでなく遠くにまでも良い値で買われてゆくようになった。ところが、河口湖と同じように移入をはかった山

中湖では、一向にワカサギの殖えたという話を聞かない。私も現地を訪ねて湖辺の人に聞いて見たが、何もそんな魚のことは知らないという。そんな筈はないが不思議でたまらなかったものそれ以上聞くのを止めておいた。ところが四年ほどたって、山中の部落の人が来て言うのには、河口湖と同じように山中湖にもワカサギを殖やしてもらいたいとのこと。そこで改めて卵を送り山中湖に移植してやったので、その後は河口湖と同様、あるいはそれ以上の繁殖を見るに至ったのである。さてそれからずっと後年になって、山中部落の区長さんが私に懺悔話をしてくれた。それは、初めにワカサギという知らない魚を殖やすということを聞いた時、そんな魚が殖えると今までとれていたアカッパラ（ウグイの地方名）が減って、湖辺の人には却って迷惑になる。そこで折角送り届けたワカサギの卵は戸外にほうり出して、みな死なせてしまった。そんなわけで、初めの時にはワカサギを殖やさないようにわざとしたのだが、河口湖の様子を見てうらやましくなり、おくれればせながら移して殖やしたくなったとのこと。雨宮さんには誠に申訳ないが、今だから白状してお詫びすると区長さんが頭をかきながら物語った。それで私にも山中湖に初めワカサギの移植が失敗した原因が良く判ったわけである。

（雨宮，1966，p.115-116）

山中湖には河口湖と同じく大正8（1919）年に初めてのワカサギの放流が試みられたが、それは未遂に終わった。雨宮自身の記憶による時間経過（＝4年）と完全な一致はしないものの、大正11（1922）年になって初めて山中湖にワカサギが導入された。このように事実を解釈するのが、妥当であろう。

問題となる時期については、大正8年は雨宮の大学院生の時代に、大正11年は助教授として教鞭をとっていた時代にあたる。雨宮がワカサギの研究を指導したという檜山は、先に示した報告（雨宮ら，1931）に名を連ねていないことから、学生指導のために取り組んだのではなく、みずからの出自に意を強くして取り組んだものと言えるだろう。

なお、この時の山中湖の住民の対応は、漁業を大事な生業とする立場からすれば、外来魚の導入を恐れることには道理があり、非難されることではない。この点に関しては、最後にも触れる。

3. 西垣晋作による穴釣りの導入

3.1. 西垣晋作の人物像

西垣晋作（図-2）は明治19（1886）年、奈良県に生まれ、明治42（1909）年に東京帝国大学農科大学林学科を卒業した（日外アソシエーツ株式会社，2004）。吉野地方の出身である（酒井名誉教授のご教授による）ということで、卒業論文では吉野林業をテーマにした（西垣，1910a，1910b）。農学部総務課人事チームによれば、明治44（1911）年に東京帝国大学農科大学講師に

着任し、昭和22(1947)年に定年退官した。この教職と並行して中央林業懇話会会長、日本林業経営者協会顧問、日本土地山林株式会社取締役などを務めた(日外アソシエーツ株式会社, 2004)。

西垣は、森林利用学講座に属し、架空索道や林道設計に関する研究にたずさわった(東京大学百年史編集委員会, 1987)。著書に「道路鉄道曲線設定ハンドブック」(西垣, 1935)、本多静六と編集した「林学要義」(本多・西垣, 1911)などがある。

3.2. ワカサギ穴釣りの導入

西垣が山中湖に「穴釣り」を導入したのは、雨宮がワカサギ放流試験を開始した14年後の昭和11(1936)年のことであった。のちになって、この時のことを書き記した西垣本人による手記(西垣, 1966)を以下に引用する。



図-2 西垣晋作の肖像
資料：森林利用学研究室所蔵

昭和11年1月(今から30年前)このワカサギも育て親の雨宮博士に会いたいだろうと同博士、農芸化学のギベレリンの藪田博士、それに林学の三浦博士と私とこの穴釣りをやった所大成功であった。これが山中湖の穴釣りの始めであった。

私はワカサギの穴釣りは以前から榛名湖でこの釣りをやって居たので、その釣法を此の山中湖に移したまでのことである。冬になると薪伐りや炭焼き位より仕事のなかったこの寒村では大人は勿論、小中学生やおかみさん達も炭と腰掛けを小さな櫃に載せて氷上に現れ穴釣りをして多少の収入を得る様になったので、私共がこの穴釣りを伝えたことは土地の人々に大いに喜ばれている。

(西垣, 1966, p.41)

さらに、西垣は寒さを避けるために「ボックス釣り」の手法も山中湖に持ち込んでいた。

このボックスは、昭和十年頃、榛名湖で榛名湖ケーブルカーの若い人が、考へて作ったものだが、私も借りて釣ってみた、ナカナカ(筆者注：原文は2文字反復記号)具合がよい、山中湖でも、昭和十三年に、四尺に七尺と云ふ、少し大型のもので、二人が釣れる様にしたが、至

極具合が良い。

(西垣, 1940 : p.4)

このように、西垣は榛名湖で行われていた穴釣りを昭和 11 年に、同じくその応用的な手法であるボックス釣りを昭和 13 (1938) 年に山中湖に導入した。このことの背景となった条件を数点指摘しておく。

第一に、西垣は釣りの造詣が深く、山深くへ調査行する際にも隙をみては竿を出すほどの熱の入れようであった(西垣, 1940, 1966)。第二に、当時の東京帝国大学農学部内で異分野間の交流があり、西垣と雨宮には交友関係があった。なお、昭和 11 年の穴釣りに同行した農芸化学の藪田博士は明治 21 (1888) 年生まれで教授を務めた藪田貞治郎、林学の三浦博士は明治 18 (1885) 年生まれで演習林教授も務めた三浦伊八郎であり、彼らが極めて近い年齢であったこともこの交友関係を育んだ可能性がある。最後に、富士演習林および山中寮の存在があるだろう。大正 14 (1925) 年に富士演習林が設立され、さらに昭和 4 (1929) 年に山中寮が開寮されたことで、林学科に所属する西垣にとっては、山中湖での心強い滞在拠点となったであろう。

4. 導入後の両氏と山中湖

以上、山中湖へのワカサギとその穴釣りの導入が東京帝国大学の教官によってなされた事情を述べた。以降も雨宮と西垣は山中湖を訪れ、ワカサギと関わりを持った事情が知れる資料があるので、二、三紹介する。

まず、雨宮に指導を受けた前述の檜山義雄の手記から、両氏が山中湖でワカサギ釣りをしたことがあったことを紹介する。

私が学生のころ、恩師、雨宮育作先生のお伴をして、ワカサギをよく釣りに行った。当時、林学科の講師をしておられた西垣晋作先生のご案内で、山中寮の東大の寮に泊まった。秋にも釣ったが、その頃まだ始まったばかりの氷に穴をあけて釣る穴釣りも教えていただいた。

(檜山, 1996, p.88)

檜山は明治 40 (1909) 年生まれであるから、彼の学生のころというのは、昭和 5 (1930) 年頃かそれ以降のことであろう。

次に、山中寮の寮委員(学生)による昭和 12 (1937) 年 7 月の日誌にある記述を紹介する。

七月三日 晴

朝四時、藪部、西垣、雨宮三教授出漁セラル、八時頃帰寮セラル、わかさぎ一六二尾の大漁ニ

表-1 富士演習林利用者記録に見る西垣晋作の来訪

年	滞在日程	人数	用件
昭和28(1953)	2月3～5日	3人	レクレーション
昭和29(1954)	2月13～14日	3人	私用
昭和30(1955)	2月5～6日	1人	私用
	2月15～16日	1人	私用
昭和31(1956)	2月9～11日	3人	私用
昭和32(1957)	2月24～25日	3人	私用
昭和35(1960)	2月8～9日	3人	私用
昭和36(1961)	2月15～16日	3人	私用
昭和37(1962)	1月29～30日	1人	私用
	2月2～5日	1人	私用
	2月17～18日	5人	私用
昭和38(1963)	2月2～3日	3人	私用
昭和41(1966)	1月27～28日	3人	私用

資料)富士演習林利用者名簿より作成

テ三先生始メ皆々大嬉ビ、早速フライニシテ御馳走ニ預リ、来寮者多ク大ヒニ賑フ、和舟ニヨットニボートニ、中ニハ先生達ノ釣熱ニ吾モトボート出シテ釣スル者モアル、疲レタセイカ皆早ク、十時ニハ静寂トシテシマッタ

(山中寮史編集委員会、1998、p.39)

なお、ここに名前が出てくる菌部とは菌部一郎のことであり、当時は富士演習林長と寮長を務めていた(林長在任期間：大正13年～昭和13年)。

最後に、昭和27(1952)年度から記録され始めた富士演習林利用者名簿から、西垣の来訪の記録をみる(表-1)。

すでに西垣は大学を退官した身にあったが、毎年のように山中湖を訪れていた。用件はワカサギ釣りや明記されていないものの、その時期は厳冬期であることから、ワカサギの穴釣りを主目的に訪れていたことだろう。

5. おわりに

以上、雨宮育作と西垣晋作を中心に、山中湖のワカサギとその穴釣りが導入された経緯を見てきた。雨宮が同郷という偶然はあったものの、西垣が穴釣りの拠点とし、その技法を広めた背景には、当地に富士演習林、山中寮という大学の一拠点が置かれていたことが大きな意味を持っていたことは否めないだろう。

一方、大学の地域貢献のあり方として、注意しておかねばならない点がある。この出来事

は、地域生態系に「国内移入種」をもたらしたことを意味している。移入当時の村人が従来の漁業対象魚への悪影響を心配したように、地域生態系への影響も懸念されてしかるべきである。この事例の場合、幸運にもそうした悪影響は指摘されていないが、地域生態系への外来種の導入は、今となつては生態系への影響の慎重な検証や地域住民との十分なコミュニケーションが求められることは言を俟たない。

ここに100年に迫る山中湖のワカサギと東京大学とのつながりが明らかになったが、このことが、地域の歴史文化資源として活用しうるものになれば望外の喜びである。

本稿をまとめるきっかけを作ってくださったのは、地元山中湖村の一般社団法人わかさぎプロジェクトの天野績男氏、高村輝彦氏、渡辺敬介氏である。天野氏には地域資料の収集にも協力していただいた。また、水圏生物科学専攻魚病学研究室の良永知義教授、森林利用学研究室の酒井秀夫名誉教授、仁多見俊夫准教授、市川美代子氏、農学部総務課人事チームの吉村哲也氏には、貴重な情報・資料を提供していただいた。記して感謝申し上げる。

引用文献

- 両宮育作（1966）富士山麓湖水のワカサギ。（富士山とともに60年—富士急行一、福本邦雄編、フジ・インターナショナル・コンサルタント出版部、東京）、113-117.
- 両宮育作・石川昌・土井久之・須賀原善太郎（1931）公魚放流試験。水産試験成績総覧：464-465.
- 両宮育作先生記念事業実行委員会（1985）両宮先生を偲びて。270pp., 両宮育作先生記念事業会、東京.
- 石城謙吉（2008）森林と人間—ある都市近郊林の物語。213pp., 岩波書店、東京.
- 檜山義雄（1996）「釣り」を考える。238pp., つり人社、東京.
- 本多静六・西垣晋作（1911）林学要義。266pp., 精美堂、東京.
- 日外アソシエーツ株式会社（2004）20世紀日本人名事典。2817pp., 紀伊國屋書店、東京.
- 西垣晋作（1910a）吉野の林業。大日本山林会報330：9-16.
- 西垣晋作（1910b）吉野の林業（承前）。大日本山林会報331：1-10.
- 西垣晋作（1935）道路鉄道曲線設定ハンドブック。修教社書院、東京.
- 西垣晋作（1940）ワカサギの穴釣り。国立公園12（1）：3-5.
- 西垣晋作（1966）ワカサギ（公魚）の穴釣。林経協月報54：40-42.
- 寺田重雄（1955）甲斐の魚。189pp., 山梨県水産研究会、甲府.
- 東京大学百年史編集委員会（1987）東京大学百年史 部局史二。1188pp., 東京大学、東京.
- 東京農工大学農学部附属演習林（1999）森の公開講座。314pp., 東京農工大学農学部附属演習林、東京.

山村順次（1994）観光地の形成過程と機能. 336pp., 御茶の水書房, 東京.

山中湖社会科副読本編集委員会（2012）わたしたちの山中湖村. 山中湖村教育委員会, 山梨.

山中湖村自然誌編集委員会（2006）山中湖村の自然誌. 222pp., 山中湖村, 山梨.

山中寮史編集委員会（1998）東京大学山中寮七十年史. 東京大学運動会山中寮委員会, 東京.